

木造大日如来坐像



〔指定年月日〕平成十一年一月二十七日  
〔種別〕有形文化財（彫刻）  
〔名称〕木造大日如来坐像  
〔点数〕一軀  
〔所有者等〕宝昌寺  
〔所在地等〕成田西三一三一三〇

## 木造大日如来坐像

本像は総高五八・五cm、像高一八cm、膝張一六cmの菩薩形坐像で、寄木造りに玉眼を嵌入している。

「金剛頂経」に説く金剛界大日如来をあらわした本像は、頭に五智宝冠を頂き、智拳印を結び、結跏趺座している。衲衣はいわゆる偏袒右肩で、右肩をぬぎ左肩からゆつたりと垂下して腰まわりや膝の部分で覆う。膝前の衲衣の裾の部分は別木で短いだが、現在は欠失し、その跡が残っている。また、膝の部分には側面に短い目がみられる。

室町時代の制作と考えられる本像は、小像とはいえ、豊富な肉付け、膝前をひろくした体躯の表現に、平安前期に盛行をみたわが国密教像の古様を再現したあとがうかがえる。肉身の部分に彩色のあとはみられず、衲衣とも像全体に金箔を押し、また白毫や両腕の腕釧は漆を盛り上げたようにみえる。台座・光背はともに本格的な形式をそなえたものであるが、江戸時代の後補と考えられる。

宝昌寺は文禄三年（一五九四）頃以来、曹洞宗の禅寺として今日まで至るが、それ以前は真言宗の寺院であったと伝えられる。現在位牌堂に安置されている本像は、その時代の古い来歴を伝える貴重な遺品である。

小像とはいえ、技法は精巧で格調のある作柄を示し、わが国密教彫像の古様を伝え、美術的に優れている。また、宝昌寺の古い歴史を物語る資料としても貴重である。

### 【文化財所在地】

